

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 22 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
鹿児島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
日本霊長類学会
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 14 日 ~ 平成 26 年 7 月 18 日 (5 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
このたび、鹿児島で行われた日本霊長類学会に参加させていただいた。心理学の領域にとどまらず、広く霊長類についての知見を得ること、ポスター発表を行い学会発表の経験を積むことが主な目的であった。発表の詳細は以下のとおりである。 発表タイトル: フサオマキザルの年齢カテゴリー弁別は種を超えるか? Does age categorization by capuchin monkeys generalize to other species? 発表者: Y. Kawaguchi, H. Kuroshima and K. Fujita 発表形式: ポスター
聴いていて最も面白かったのは自由集会「遊びの霊長類学の展望」であった。「遊び」というのは生存に直積的に関係ないように思えるにもかかわらず多くの種で見られるので個人的に非常に気になるトピックのひとつであり、学部生時代から関心を持っていた。遊び研究の難しさは遊びの定義があいまいであること、また機能が不明確で行動コントロールが困難であることによるそうである。確かに、数名の方が話されたがある方が遊びとして紹介するような行動が別の方にとっては遊びに含まれないなど、定義の問題はなかなか難しそうであった。様々な遊びの事例は非常に興味深かったがそれをどのように体系立てて研究するかとなると話は別で、簡単ではなさそうだと感じた。
学会期間中、最も有意義だったと感じたのはポスターセッションであった。コアタイム以外にもポスターを見に来てくださったので、結局ポスターセッションのかなりの時間を発表に費やし、15名ほどに聞きに来ていただいた。「そもそも、ヒトの子どもは顔を見てオトナとコドモの弁別をできるのか」ということや「育児放棄をする個体は赤ちゃんが可愛いと感じないのか」という意見は非常に面白く、調べてみたいと感じた。また、ニホンザルのエキスパートからは、あまりよく見えない個体がオトナかコドモか見分ける際には大きさなどの外見ではなく動きで判断していると教えて頂いた。このコメントも私にとっては非常に貴重なものであった。どの方も私の研究テーマに大変興味を示してくださったので、今後もこのテーマで研究を続けて必ず明らかにしたいと感じた。また、今回ポスター発表は自分の発表だけではなく、私は PWS が関西大倉高校・北野高校の高校生と行っている高大連携プロジェクトのチューターを行っており、実習生は今回もポスター発表を行った。そして、去年の霊長類学会に引き続き、ポスター賞をいただいた。高校生にとっても本学会は良い機会となったようなので、今後、継続して実習を行うことで得られる成果が期待される。
また、自由集会前に時間があつたため、鹿児島水族館を訪れた。ジンベイザメやマグロやカツオなど黒潮の流れに乗って回遊する魚を展示している黒潮大水槽が素晴らしかった。トンネル内から頭上を泳ぐジンベイザメなどの魚の腹面が観察できた。また、「イルカの時間」と題されたイベントも単なるイルカショーとは少し違った。例えば、イルカの色覚を示すために、合図として見せるボードを黒と白の二色を用意し、イルカは黒だとジャンプ、白だと水をかけるといったものであった。単純な実験ではあるものの、一目で二色を区別していることがわかるため子どもにもわかりやすいと感じた。また、エコロケーションを示すために目隠しを装着したイルカの泳ぎを見せたり、特有の音声をマイクで流したりしているのも、イルカの生態をわかりやすく示す良い展示だと感じた。10日ほど前にはちょうどシャチの観察実習に参加していたところだったので、そのような行動展示は非常に面白かった。
学会翌日には平川動物公園を訪れた。バーバリーシープとマントヒヒ、シロサイとキリンとシマウマとダ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

チョウとフラミンゴなどが混合飼育されていた。動物園・博物館実習で展示学について学んだ後であったため、展示の仕方に以前以上に興味を持った。どちらの展示の動物同士も同所的に生息しているようではなかったため、混合飼育がおこなわれている理由が疑問であった。鹿児島水族館のよかった展示として、頭上に動物を観察することができる展示を挙げたが、平川動物公園でも感心したのはトンネル内から見上げると真上にコウモリがみられる展示であった。普段見ることのない角度から動物を観察できるのは非常に新鮮であった。さらに、現在行っている実験にリスザルのアカンボウの顔写真が必要であったのだが、平川動物公園には5月生まれと6月生まれのアカンボウがおり、刺激用の顔写真を得られたのがかなり大きな収穫であった。

5日間、霊長類学会も興味深いテーマの発表を聴いたり、ポスター発表を行ったり、高校生の発表を見届けたりととても充実しており、学会以外にも有意義な時間を過ごすことができ非常に満足であった。動物園、水族館の見学の際も動物園・博物館実習やシャチ実習で学んだことを再認識した。



ポスター発表を行う高校生



頭上を泳ぐエイ



目隠しを装着したイルカ



黒のボードの合図に対してジャンプするイルカ



アフリカの森と題された展示



バーバリーシープとマントヒヒ

6. その他 (特記事項など)

本学会への参加はPWSの支援を受けて行いました。ここにお礼申し上げます。